

# 夏秋どりいちご「とちひとみ」の栽培技術の確立

## 1. 試験のねらい

育成した四季成り性いちご品種「とちひとみ」(2007年3月登録)は、従来の品種に比べて果実が硬く食味も良いことから、夏秋どり用の品種として期待されている。2004年から現地で栽培が始められたが、夏季の高温期に草勢低下や受精障害が見られ、収量が安定しない状況にあった。このようなことから、収量が安定し正形果率の高い栽培技術を確立する。

## 2. 試験方法

試験は黒磯分場(標高350m)で実施した。2005年は、定植時期(4月15日、5月18日、6月14日)、摘花の有無と摘花房の間隔(2、3、4週間)、窒素施用量(10、15、20kg/10a)について、2006年は、最初に着生させた花房の着果期の芽数(1芽、3芽、放任)とその後の摘花房処理の有無、遮光処理の長さについて(80%遮光で昼間、終日)について、2007年は、被覆資材(農ビ+遮光、遮熱フィルム)、ベッド冷却(畝内通水)、追肥(3、6kg/10a)について、それぞれ検討した。

## 3. 試験結果および考察

### (1)2005年

- ・定植時期は、6月14日(春に採苗した苗)、5月18日(秋に採苗した苗)と比較して4月18日(秋に採苗した苗)の可販果収量が多かった。乱形果の発生がやや多かったが、4月中旬定植が適していた(図-1)。
- ・摘花は5花程度に、摘花房は2週間毎に行うことで、可販果および正形果収量が多かった(データ省略)。
- ・10a当たりの窒素施用量は、20kg、15kgと比較して10kgが可販果および正形果収量が多かった(図-2)。

### (2)2006年

- ・芽数は、放任、3芽に対して1芽にすると心止まり株の発生が多くなった(図-3)。芽数を3芽とし摘花房(2週間毎)を行うことで可販果および正形果収量が多くなった(図-4)。
- ・40%遮光を基本とした場合の80%遮光(二重被覆)の長さは、終日被覆と比較して昼間被覆(9~15時)が可販果および正形果収量がやや多かった(データ省略)。

### (3)2007年

- ・被覆資材については、遮光をすることでハウス内温度はやや低くなったが、遮光しない場合に農ビ、遮熱フィルムともベッド内通水を行うことで地温がやや低くなった(データ省略)。可販果収量は遮光しない場合が多かった。遮熱フィルム+ベッド冷却が最も多収で、総収量は3,758kg/10a、正形果収量で2,012kg/10aであった(図-5)。
- ・追肥の影響は、判然としなかった(データ省略)。

## 4. 成果の要約

とちひとみの夏秋どり栽培に適した体系は、秋に採苗した苗を4月中旬に定植し、窒素の施用量は10a当たり10kgを目安とする。最初に着生させた花房の着果期の芽数を3芽程度に整理し、その後発生する花房を2週間毎に整理する。盛夏期の遮光は基本的に行わないが、草勢が低下したような場合は40%程度の遮光に留める。このような体系化で、正形果収量が2,000kg/10a程度見込める。

(担当者 いちご研究所 植木正明)

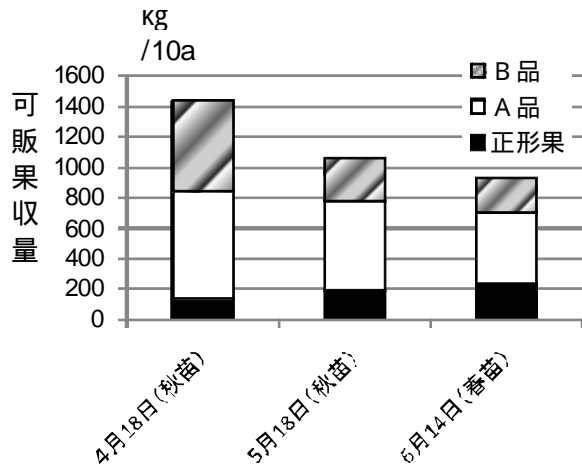


図 - 1 定植時期（苗質）が可販果収量に及ぼす影響（2005）

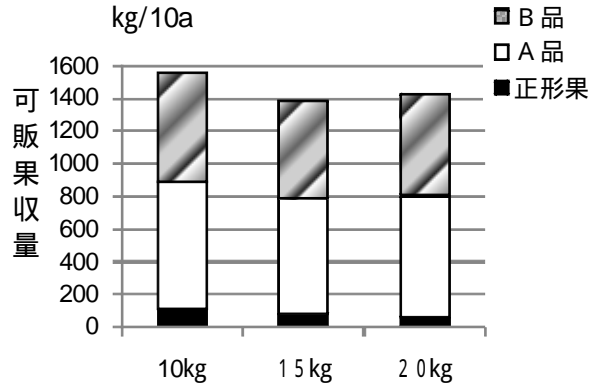


図 - 2 窒素施用量が可販果収量に及ぼす影響（2005）

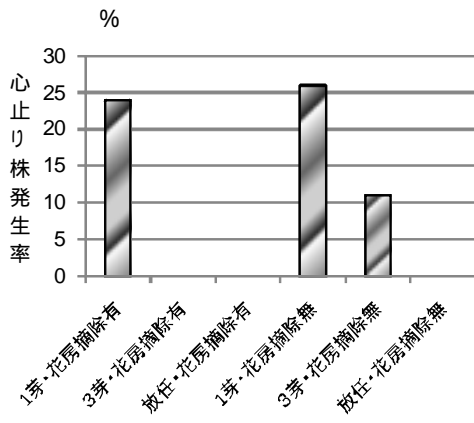


図 - 3 芽数と花房摘除の有無が心止り株の発生に及ぼす影響（2006）

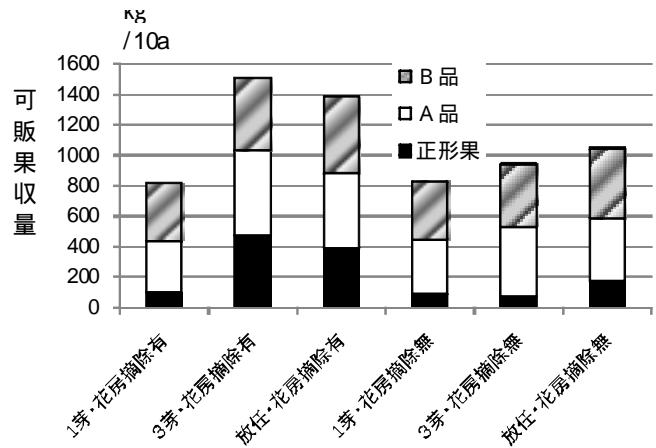


図 - 4 芽数と花房摘除の有無が可販果収量に及ぼす影響（2006）

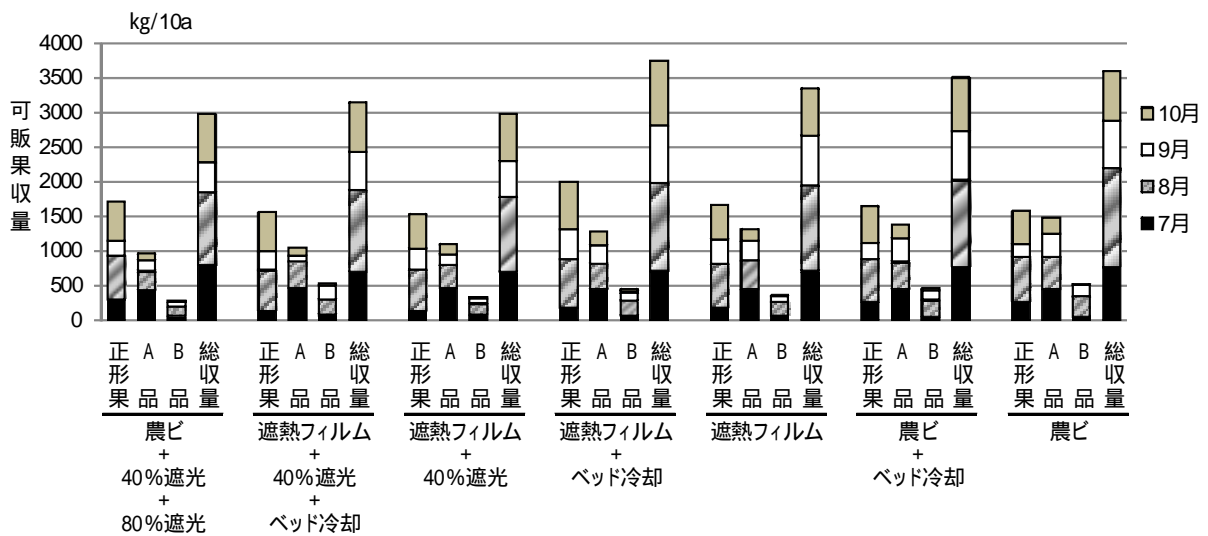


図 - 5 被覆資材の違いとベッド冷却の有無が可販果収量に及ぼす影響（2007）